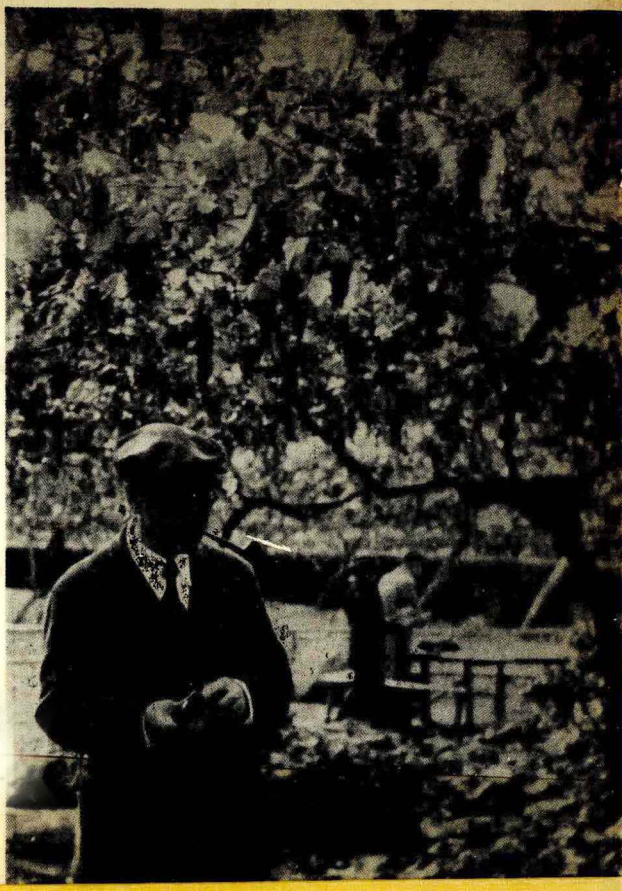
春山行夫ノート

小島輝正



昭和初期モダニズム文学の最も一徹なイデオローグとして、萩原朔太郎、小林秀雄という詩壇、論壇を代表する権威に果敢な戦いを挑み、戦前モダニズムの最後の孤塁を守った春山行夫氏の名は知られていても、その業績は必ずしも正当な評価をえていない。その栄光と屈折をひらく。

春山行夫ノート

小島輝正

蜘蛛出版社

著者略歴

1920年　東京生れ
1941年　東京大学フランス文学科卒
現在　神戸大学教授
主要著書　「サルトルの文学」（ぺりかん社）
「アラゴン・シュルレアリスト」（蜘蛛出版社）
主要訳書　アラゴン「レ・コミュニスト」共訳（三一書房）
「聖週間」（平凡社）「アニセまたはパノラマ」（白水社）

春山行夫ノート

一九八〇年一一月一五日　発行
定価　一七〇〇円
著者　小島輝正
発行者　君本昌久
発行所　蜘蛛出版社
〒653　神戸市長田区高取山町一丁一一一二〇
振替口座神戸七一七六六
印刷所　太陽印刷工業KK

春山行夫ノート　目次

Ⅰ はじめに 7
Ⅱ 「詩と詩論」以前 15
Ⅲ 「無詩学時代の批評的決算」 25
Ⅳ 萩原朔太郎への挑戦 47
Ⅴ 「事実の芸術から秩序の芸術へ」 65
Ⅵ 神原泰との論争 77
Ⅶ 『文学評論』 91

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅷ 『文学評論』2 102
Ⅸ 小林秀雄への挑戦 118
Ⅹ 「行動」への参加 135
Ⅺ 「セルパン」 153
Ⅻ 「セルパン」以後 180
おわりに 188
＊
「春山行夫ノート」の出版にふれて／君本昌久 192

春山行夫ノート

I　はじめに

昭和四六年一〇月号の「新日本文学」に「飜訳についての雑感」という文章を私は書いた。その年の九、一〇、一一月にわたって文芸時評を頼まれて書いたもののうちの一つである。

この文章は、題目通りの雑感で、格別実のあることは書いていない。西洋の文学の飜訳の隆盛ということについてふれながら、とくに日本におけるシュルレアリスムの受容・咀嚼の歴史や、いわゆるモダニズムの解釈について大雑把な感想をのべたものにすぎない。いくらか目新しい部分があったとすれば、それは、そのなかの次のような個所であっただろう。

「（前略）そのシュルレアリスム受容の歴史が、あとたとえば一〇年もすると、昭和以後の日本の外国文学思想咀嚼の歴史の本流とみなされることになるかもしれぬ。そういう見方にもとづいて昭和文学史が書き直されることになるかもしれぬ。（中略）いまはいくらか向うみずにみえるそのような座標軸が、芥川竜之介の死にはじまって、プロレタリア文学の多忙な盛衰に多くの頁を割く従来の昭和文学史の定型を大幅に修正することにならないとは限らぬ」。

これを私は、必ずしもその場かぎりの、あてずっぽう、放言として書いたわけではない。いつか、

だれかが、そういう試みをして不思議、法外とは思わない。もし私にその余裕と力量とがあれば、自分でそれをしてみたいという気持すらある。つまり、シュルレアリスムにかぎらず、当時――そしてその後も長い間――モダニズムとか、形式主義とかいう呼称で一がいに呼び捨てられていたものの正当な意味づけを、きちんとやっておくべきだという気持が私にある。そうでないと、日本にかぎらず、あるいは日本をふくめて、ひろい立場からの現代文学の理解は不可能であろうと思う。

しかし、さしあたって、いきなり私がそれをはじめようというのではない。そのとばっ口のとばっ口をすらやろうというのではない。それは、五年、一〇年を要する仕事であろう。それを私は、借金としてではなく、楽しみとして私に残しておきたい。

さしあたって私がこの文章を書くには、そのこととも大いにかかわりがあるが、もう一つ、自慢にならぬ理由がある。

さきに数行を引いた文章のなかの、それに先立つ個所で、私は春山行夫のことにふれた。つまり、春山行夫が昭和の初期に、雑誌「詩と詩論」（のちに「文学」）や、「現代の芸術と批評叢書」の編集・刊行に果した役割、さらにその後の「セルパン」、戦後の「雄鶏通信」での役割などについてふれ、「いわゆるモダニズムに賭けたこの人物の執念はなまなかのものではない」「この春山行夫などの業績を、プラスマイナスをふくめて追認する仕事をだれかがしなければならないのだが、私の知るかぎりではそれはまだ十分にされていない」と書いた。

それはいい。全く正当な云い分であると私は思う。しかし、そこで私は大変な失敗をした。春山行夫を殺してしまったのである。全く書かでもの一句であっただけに、この軽卒は弁解のしようがなか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った。私は「春山行夫はたしか昭和四十三年に物故した」とついでのようにそこに書いてしまったのである。

なぜそんなことを書いたかということは、文字通り弁解になる。私はそれをある人にたずね、その人が「たしか」という保留をつけて私にそう答えた。そこで、「たしか」という、ありようは「不たしか」な副詞をそのままつけて私が原稿に書いた。ただし、それがどうも「不たしか」に思われたので、「新日本文学」の編集部に依頼するという形で、「事実をたしかめて下さい」と、原稿に傍記した。

従って、原稿が活字になって、その個所がそのままになっているのをみたとき、編集部による確認を経たものと私は思っていたのである。

しかし、これが誤まりであった。事柄が事柄だけに、とんでもないとか、もってのほかのとかすらいいようもない言語道断の誤まりであった。私の傍記を見すごした新日本文学編集部にも問題がないではない。そこに尻を持ってゆけば、その分私の責任は軽目になるが、それはやはりそういうものではない。そういうことを自分でたしかめもせずに人にたずね、その他人の「たしか」をそのまま自分のことばにし、その確認をさらに他人にまかせた、という意味で、二重三重の責任が私にある。二重三重の軽卒、横着を私が冒したことになる。

「新日本文学」の翌四七年三月号の中野重治の文章「緊急順不同」（一）で、その誤まりを指摘されたとき、私は全く赤面した。むろん、春山行夫に向ってである。その文章には、同時に編集部の「訂正とおわび」という断り書がついていて、さきの私の「傍記」のことも書かれていたから、私の

体面は一応保たれていたが、それにしても私の軽卒、横着は云い開きのできぬものである。

事柄が事柄だけにこれは迂濶ではすまぬ。というより、私のごとく迂濶であってはならないことである。一たん迂濶だったとなると、あとから取返しのつけようがない。謝まるにも謝まりようがない。春山行夫の仕事について、いつか必ず書こうと思い決めたのはそのためである。それはまた、さきにのべたモダニズム再検討のとばっ口の、そのまた遙か手前の始まりくらいの意味をもふくむことになるだろう。そのことでまた、私は、春山行夫に対して冒した無礼を、いくらか償うことができるかもしれない。

以下の文章を書くことを思いついた私の公的ならび私的な理由が以上の通りである。

*

春山行夫の名前を、少くとも私たちの年代、またはそれ以上のものは、だれでも知っている。私自身は若いころ、あまり詩をよまなかった。従って、詩人としての春山行夫の仕事には、ほとんど無智であった。この本で扱う彼の詩論や文学論も、それらが書かれた昭和初期から10年にかけてまだ小・中学生であった私が、当時それを読んだわけではない。私が春山行夫の仕事に接したのは、まずは昭和12年8月に出た訳書『フランス現代文学の思想的対立』(Regis Michaud:Modern Thoght and Literature in France, 1934) であった。そのころ私は旧制高校生で、大学の仏文科を志望していたので、フランス文学関係の本を手当り次第に読みあさっていたのである。この本は、その後四十年以上たった

今でも私の書棚に残っている。敗戦後の窮乏生活で眼ぼしい本をはじから売り払ったあげくのことだから、どこか手放しがたい思いがこの本には残っていたのであろう。

当時の春山行夫の存在意義は、むろんこれだけに止まらない。私のみならず、私の年代で西欧文学を志したものは、当時の欧米の新しい文学の紹介者として、またそれを兼ねた編集者、出版人としての彼に絶大な恩恵を蒙っているはずである。昭和10年から15年にかけて当時の第一書房の編集局長であり、かつ雑誌「セルパン」の編集長でもあった春山行夫が残した業績はきわめて大きい。

さらに、というよりも、それこそが春山行夫の本領というべきだろうが、彼は昭和初期のモダニズム詩の理論家ならびに実作者として北川冬彦や安西冬衛や北園克衛や竹中郁、滝口修造や西脇順三郎とともに重要な業績を残した。同世代あるいは直後世代に及ぼした影響力の点では最も強力なイデオローグであったといっていい。

私がこの本で主として扱うのは、この詩論家ならびに文学理論家としての戦前期の春山行夫であり、そこで彼がはたした、あるいは十分にはたしえなかった役割である。ただし、詩人としての春山行夫については、自分が詩を書かず、かつ当時のモダニズム詩を十分に汎く読んでいない私としては評価を下す資格がない。私の対象はもっぱら理論家としての春山行夫に限られる。

また、この本はもとより春山行夫の評伝ではない。したがって、彼の個人経歴や実生活については、必要に際して多少言及することはあっても、ほとんどふれることはない。そのような本格的な仕事をだれかがいつかすることを私は期待し、そのために私のこの文章が役立つことを願うけれども、それは私の手に余る仕事であった。

＊

それにしても、本論に入るまえに、春山行夫の経歴のあらましを紹介しておく必要はあるだろう。中央公論社版『日本の詩歌』第二五巻に春山自筆の略年譜がある。それをさらにつづめて骨組だけにし、いくらかことばを添えると、以下のようなことになる。

明治35・7・1　名古屋に生れる。本名市橋渉。父親は陶器の絵付けの第一人者であった。
大正5　14才　名古屋市立商業に入学。翌年、父の病いで退学、家業をつぎ、夜学の英学校に通う。
大正9　18才　一家の移転で一人名古屋に残り、株式取引所に勤めた。友人井口蕉花と詩誌「赤い花」をはじめる。
大正11　20才　佐藤一英らと「青騎士」創刊。油絵も書いた。詩友、画友がふえる。
大正13　22才　第一詩集『月の出る町』刊。8月父の死後、上京。
昭和3　26才　厚生閣書店に入って、「詩と詩論」の編集を担当する。この雑誌は昭和7年「文学」と改題した。通巻20巻、毎号、詩・エッセーを書いた。
昭和8　31才　「文学」終刊。厚生閣をやめる。
昭和9　32才　第一書房の「セルパン」の編集を担当。翌年から同書房の編集局長になる。
昭和12　35才　詩誌「新領土」の編集同人となり、16年4月の終刊まで毎号執筆した。
昭和14　37才　旧満州、北支旅行。
昭和15　38才　第一書房をやめて、文筆に専念する。
昭和20　43才　5月の東京大空襲で家を焼かれ、蔵書の大部分を失う。
昭和21　44才　雄鶏社「雄鶏通信」の編集に当る。以後、百科全書的な文化史の仕事に専念、現在に至る。78才。（昭和55年）

名古屋在住の詩人としての出発。大正十三年上京後、戦前までの詩人、評論家、飜訳家、海外文学紹介者、出版・編集者としての多彩な活躍。そして戦後のアンシクロペジストとしての仕事。それが、春山行夫の経歴のしごく大づかみな輪廓である。

著書の数は、当然ながら、すこぶる多い。単行本になっていない文章をあわせれば、著述量は厖大なものになるだろう。以下には、私が対象とする戦前にかぎった著書――単行本のみ――をかかげる。私の調べえたかぎりのもので、若干の漏脱があるかもしれない。しかし、主要なものはひろっているはずである。

刊行年	書名	ジャンル	出版元	註
大13	月の出る町	詩集	地上社	(1)
昭4	植物の断面	〃	厚生閣	
〃	楡のパイプを口にして	エッセー集	〃	
〃6	詩の研究	〃	〃	(2)
〃7	シルク&ミルク	詩集	ボン書店	
〃8	純粋詩とフォルマリスム	エッセー集	金星堂	
〃8	ジョイス中心の文学運動	〃	第一書房	(3)
〃9	文学評論	〃	厚生閣	
〃10	花々	詩集	版画荘	
〃11	花とパイプ	エッセー集	第一書房	

〃11	R・ミショオ・フランス現代文学の思想的対立	訳　書	第一書房
〃14	飾窓	エッセー集	赤塚書房
〃15	新しき詩論	〃	第一書房
〃	満州風物誌	紀　行	生活社
〃16	現代世界文学概観	文学史	新潮社 (4)

註

(1) 年譜には第一詩集とあるが、同詩集巻頭の著者自身の手になる「例言」には、次のようにある。

「『月の出る町』は詩集『海は美しい』から選んだ。『海は美しい』は八十八章、二百数十頁の内容をもつ、私の詩作の上からは第五詩集にあたる詩集で、年代は一九二二年の末から一九二三年八月までのものが蒐めてある」

とすると、著者は、一九二二年末―20才―までにすでに4冊の詩集をもっていたことになる。これらの詩集の詩篇のうちあるものは、のちに詩集『花々』におさめられた。なお同じ「例言」のあとの方に、「勿論、その後の（第五詩集以後の）作にかかる約三百頁にもあまる詩稿に就いては、考えを及ぼす余地がなかった」とある。

(2) 『詩の研究』は、この初版本ののち、昭和11年に同名の改訂版（第一書房）、さらに昭和14年に再改訂版（同上）が出され、その都度収録のエッセーに若干の異同がある。

(3) この評論集は、のちに『二十世紀英文学の新運動』という題で、昭和10年、第一書房から「略装廉価版」として再刊された。

(4) 戦前の旧『新潮文庫』である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com